維持血液透析患者における労働機能障害の調査

矢部広樹　聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部理学療法学科

血液透析治療は、就労継続のために効果的な治療法である。一方で、慢性腎不全患者は労働機能障害を抱える患者が多く、また就労中の透析患者における労働機能障害の状況は不明である。本検討の目的は，特に就労支援に特化したオーバーナイト透析患者における労働機能障害を調査することである.

対象と方法：外来透析クリニック 2 施設において、オーバーナイト透析を実施している就労中の患者 42 名の患者を対象とし、Work Functioning Impairment Scale（以下，WFun）にて労働機能障害を測定した。労働機能障害は 14 点以上を労働機能障害ありとし、また 14 点から 20 点を軽度、21 点から 27 点を中等度、28 点から 35 点を高度とした。さらに対象者の運動セルフエフィカシー、運動習慣、及び採血データを聴取した。そして Wfun を従属変数、各データを独立変数とした重回帰分析を実施した。

結果：Wfun の平均は 12.5±6.3 点であり、15 名（35.7%）に労働機能障害を認めた。軽度の労働機能障害を有する患者は 12 名 (28.6%)、中等度は 2 名 (4.8%)、高度は 1 名 (2.4%) であった。重回帰分析では、交絡因子で調整の後も、WFun は低い運動セルフエフィカシーおよび標準化蛋白異化率（r=0.31）と有意な関係を示した。

結語：就労中のオーバーナイト透析患者は、一定の割合で労働機能障害を有していることが明らかになった。本研究の結果は、夜間透析患者の労働機能障害の予防やケアに役立つエビデンスになると考えられる。